



「おしゃれ」その他

昨日の古文の授業の時、「詩とは何か」という話をした。結論だけもう一度書くと、詩とは「表現のおしゃれ」であるということになる。これは何も（残念ながら…笑）私が言ったことではなく、詩人の杉山平一さんという方がご著書の中で述べていらっしゃることである。

私たちは、「詩とは何か」と聞かれると、つい「心の中にある思いを…」といった感じで、書かれている内容について注目したり、「定型であったり、自由であったり、一行が短かったり…」と、書かれている形態に目がいきがちなのであるが、それを踏まえた上で「表現のおしゃれ」と簡潔に分かりやすく言い切った詩人の定義は、自らのその表現と格闘していらっしゃるに違いない背景もあってか、なかなか優れていると思う。

「おしゃれ」だから、分かる分からないもあるし、好き嫌いもある。大衆受けする「おしゃれ」もあれば、マニアックな「おしゃれ」もあるというわけで、詩の好き嫌いが割合ハッキリ分かれる理由も説明がつく。谷川俊太郎の詩などは、ユニクロのファッションみたいなもので（といたら、ご本人は怒るだろうなあ…）、表面的には分かりやすく、誰にでも受け入れられやすい。一方、「日本近代詩の父」とも称される萩原朔太郎の詩は、現代の諸君の目から見ると、（まあ「ロリータ」までは入らないにしても）「ゴシック・ファッション」みたいなもので、かなりその道に親しんでいる人しかお召しにならないモノといった印象を持つに違いない（ちなみに、「ゴシック・ファッション」「ゴスロリ」が分か

らない人はググって見て下さい）。

*

授業で扱った「唐ころも着つつ～」の歌は、在原業平の「おしゃれ」感覚満載の歌だったわけである。現代の「おしゃれ」だって理解するのが難しいのであるから、ましてや平安時代の「おしゃれ」感覚を理解するのは至難の業である。

ところが、これが入試にはよく出題される。特にほとんどの諸君が受験する「センター試験」にほぼ毎年出題されるという題材なのである。従って、いろいろな和歌の作品（＝いろいろな「おしゃれ」）に触れながら慣れていくことが大切である。自分では決してしないだろう「おしゃれ」ではあっても、そのコンセプトを理解できるくらいにはならなければならないのである。

*

さて、季節の変わり目で体調が今ひとつの人もいるかも知れない。体調が悪い時に無理して勉強すると悪化することもある。その結果、欠席してしまうようなことがあると、なかなか大変なことになる。昨日の「唐ころも着つつ～」の歌なども、授業を聞いても理解しにくかったら（欠席してしまっても）授業が聞けず、後から自分で理解しようとしても、ハードルが高そうなことは容易に想像できるだろう。

ということで、欠席はできるだけ避けたいものだ。ちょっとでも具合が悪く感じたら、家で勉強は無理せずに早めに休憩をとり、翌日の学校に備えるよう心がけよう。